

光触媒研究会

1. はじめに

本研究会の遠祖は、研究会制度が開始された翌年の1988年から始まる「エレクトロキヤタリシス研究会」である。1994年には、その後継研究会として「電子または光子がかかわる触媒研究会」が発足した。触媒反応のドライビングフォースとして外場を作用させるということを強調して命名されたものと思われる。「光触媒研究会」は、さらにその後継研究会として2004年に引き継がれたものである。また、当研究会発足のもう一つのきっかけは「光がかかわる触媒化学シンポジウム」の開催である。同シンポジウムは「光がかかわる触媒化学の小討論会（触媒学会主催，1979 - 81年）」として始まり第1～3回「太陽光エネルギー変換にかかわる触媒化学シンポジウム（理研，1982-84年）」を経て1985年から現在のタイトルに至っている。連綿と続くこの研究分野に新しい風を吹き込んできた日本の触媒学会を中心とする研究者の当該分野への貢献は極めて大きい。可視光水分解をはじめとするこの研究分野においては、日本が世界をリードしている。

2. 今年度の活動内容と展望（敬称略）

今年度も、「光がかかわる触媒化学シンポジウム」（第38回）を6月21日に開催した。今年度は初めて開催地に中部地区を選択し、トヨタ産業技術記念館を会場に使用した。また、例年どおりに年2回開催される触媒討論会のセッションに参加した。

光がかかわる触媒化学シンポジウムは、企業からの特別講演（1件）、研究成果を総括的に解説する総合講演（6件）、最新の研究成果をアピールする一般講演（5件）、大学（主に学生）と産業界からのポスター発表（24件）で構成された。例年との違いとして特筆すべき点は、今年度は総合講演の希望者が6件と激増したこと、また初参加での発表を行う研究室や企業のチームが増加した事が挙げられる。これは初めて中部地区の企業サイトで開催した事と関連が深いと推察される。参加者は67名であり、口頭発表に対して活発な議論が行われた。ポスターセッションにおいても、特に学生と若手研究者との間で活発な討論がされ、審査の結果、学生5名にポスター賞が授与された。

長崎大学で行われた第124回触媒討論会に光触媒セッションを企画した。発表件数は口頭A2、口頭A1、ポスターで各々4件、62件、32件であった。発表総数は昨年度よりさらに多く、2011年度から継続して全セッションの中で最多の発表件数となった。特別講演においては、高鍋和広先生（東大）に「電極触媒の知見を利用した粉末光触媒反応の解明」を、依頼講演においては、寺村謙太郎先生（京大）に「不均一系光触媒を用いたH₂Oを電子源とするCO₂の光還元」をお願いした。いずれの講演も盛況であった。

2020年度は、より産学官連携を意識した研究会活動を実施したい。

3. 世話人代表

森川 健志

〒480-1192 愛知県長久手市横道41-1 (株)豊田中央研究所

E-mail: morikawa@mosk.tytlabs.co.jp

光触媒研究会HP: <http://www.shokubai.org/com/photo/>